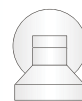


群像 創立者18人はこんな人



トランプの元祖にして名古屋中大党の盟主



ふじ た たか さぶ ろう
藤田隆三郎

1856(安政3)～1930(昭和5) / 愛媛・宇和島
1869年、大阪で英国領事館の通訳官であったアストンに英語を習ったことをきっかけに、翌年アストンに従い渡英。その際渡航を急いだことから宇和島藩士の身分でありながら、「商人」の渡航許可証を手に旅立ったという。アストンの故郷アイルランドのベルファーストで2年ほど学んだ後、ロンドンに渡ったが、資金が底をつき志半ばで74年に帰国。その時持ち帰ったカードが「トランプ」としてのちに日本で流行ることになる。開成学校から東京大学法学部へと進み、78年に卒業。98年、名古屋控訴院長。同控訴院の判検事を学員で占めてしまうほど大の中大びいきであった。英吉利法律学校では、国際公法などを講義。

威権に屈しなかった実力主義者



たか はし けん ぞう
高橋健三

1855(安政2)～1898(明治31) / 千葉・曾我野
1870年、高徳藩の貢進生に選ばれ大学南校に入学したが、病氣のため休学。法学を志し、その後東京大学法学部に進学するも78年中退。「学業は実力さえあれば卒業しなくても同じ事」と全く意に介さなかった。翌年、駅逓局を皮切りに文部省などの書記官を務め、89年帝国憲法発布直後、内閣官報局長に就任。自恃と号した高橋は、この時官報号外に掲載された帝国憲法の前文中に1字誤りがあったことの責任の所在をめぐって、憲法制定の立役者で当時枢密院議長であった伊藤博文と激しく対立。一歩も引くことのなかった高橋に対する伊藤の評価はかえって高まり、英吉利法律学校に「英文帝国憲法義解」の版權が与えられたといわれている。また官報局長でありながら、政府の民法典を批判、その実施延期運動では中心的存在であった。英吉利法律学校では、商船法などを講義。